


WAFCAホッ!とニュース

★第154号★ 2017/6/29 発行

〈発信〉認定NPO法人アジア車いす交流センター(WAFCA)
住所 〒448-0834 愛知県刈谷市司町1-2 ふれあいプラザゆきそう内
TEL 0566-23-5822(内線5990-200) FAX 0566-23-5827(内線5990-900)
E-mail ZC8WAFCA@denso.co.jp URL <http://wafca.jp>  もチェックを!
※所属などの変更の際はお知らせください。またこのニュースはE-mailアドレスをお持ちでない方に送付しています。アドレスをお持ちの方は上記までご連絡下さい。

★★★ 目次 ★★★

- [1] タイ 車いすセミナー報告
- [2] タイ 学校バリアフリートイレ
フォローアップ調査報告
- [3] インドネシア「車いすがあっても…」
から「車いすがあれば」へ



[1] タイ車いすセミナー報告 ～WAFCAタイランド 17年間のあゆみ～

6月19日から21日の3日間、バンコク近郊に位置するノンタブリー県にて、タイ国内における車いすサービスの今後のあり方を議論するセミナーが開催されました。本セミナーは、タイ身体障がい者協会、シリントン国立医療リハビリ研究所、障がい児財団、WAFCAの共催で行われました。関係省庁も参加する国レベルのセミナーで、日本事務局からも職員2名がオブザーバー参加しました。WHOの定める車いす提供における8つのステップの重要性を軸に、車いすサービスの現状に関する情報交換、問題点の整理、サービス向上のためのグループ討議、さらには政府への政策提言までと、内容の濃い3日間となりました。WAFCAからはスポンタム理事長とウィング事業部長が登壇し、17年間車いす提供を通して、タイの障がい者福祉にどのように関わってきたのかを発表しました。スタンダードタイプの車いす提供から始まり、17年の時を経て体に合った車いすの提供を心がけるようになったこと、フィッティングの重要性やフォローアップの大切さを認識し、ひとりひとりと向き合った活動を展開していることなど、WAFCAの歩みを改めて実感するセミナーでもありました。またそうした取り組みからの意見も盛り込まれた政策を、5つの採択としてまとめ、国へ提言書として提出されました。当事者の方やその保護者、教員など多くの方と共に議論するセミナーでありました。



[2] WAFCA タイランドの現場から ～タイ 学校バリアフリートイレ フォローアップ調査報告～

2006年度外務省「草の根・人間の安全保障無償資金プロジェクト」により、バリアフリートイレを設置した東北地方の学校(9校)のフォローアップ調査を行いました。6校は現在も使われており、2校は壊れて修理予算待ち、1校は校舎建て替えの予算が下りたため、旧校舎とともに取り壊されました。現在、すべての学校で下肢障がい児は通っていませんでしたが、農村の学校では少子化で予算が減り、設備費がほとんどないため、学校の貴重なトイレとして活用されていました。ある学校は清潔で使いやすいトイレとして県の病院から表彰されていました。



しかしこのプロジェクトにはある問題がありました。当時在学していた障がい児10名を申請対象としたため、彼らの卒業後、対象者が減少したと見なされ「効果が見られない・改善が必要なプロジェクト」として指導を受けることになってしまったのです。今後支援を考える上で、目的と対象の選び方、地域を巻き込んだ長期的な計画が重要だと改めて実感しました。この教訓を生かし、現在も「みんなにやさしい学校づくりプロジェクト」として事業を継続しています。教育省でも全国の学校にバリアフリートイレを設置する案が出ており、WAFCAのプロジェクトマネージャーも意見交換会に参加しこれまでの知見を活かすことができました。

[3] WAFCA インドネシアの現場から

～「車いすがあっても…」から「車いすがあれば」へ～

ちょうど1年程前に出会った兄弟、兄のマルダニ君(17歳)と弟のダルマワン君(14歳)。幼いころはよく一緒に遊んでいたと言う。マルダニ君は小学4年生まで学校に通っていたが、5年生になる年を境に少しずつ筋力が衰え、立つことも歩くことも出来なくなった。それから7年間、ほとんど家の中から出ていない。弟のダルマワン君は生まれつき知的障がいがあるため、元々学校には通わせていなかった。そして、マルダニ君と同じようにだんだんと筋力が衰えていった。徐々に出来ることが少なくなっていく病を抱えながら、現在二人は日中のほとんどの時間を家の中で過ごしている。しかし、二人が顔を合わせることはない。二人きりになると弟のダルマワン君が兄のマルダニ君に手を上げてしまうからだ。腕も足も動かせなくなったマルダニ君は抵抗すること



家の中で母親の帰りを待つ兄 マルダニ君



家の外で過ごす弟 ダルマワン君

が出来ない。そのため、母親が仕事に出ている間、マルダニ君は家の中に、ダルマワン君は家の外に隔離されることになった。父親はすでに病死しており、現在は母親と長男、そしてマルダニ君、ダルマワン君の4人で暮らしている。長男は高校に通っているが、授業が終わるとすぐ家に帰り、積極的に二人の弟の面倒をみてきた。母親も長男も、そしてマルダニ君とダルマワン君も、みんな必死で生きている。しかし、これまで近所の人にも知られることなく、孤立していたこの家族には、国からの支援は一切届かなかった。ある時、WAFCAIがこの地域に車いすを寄贈する計画があると聞いた1人の地域ソーシャルワーカーが、住民調査のためこの村を巡回していた。そして、そのときにこの家族の存在を知った。調べてみると、戸籍は

あるものの、そこにはまだ父親の名前が残っていた。地域ソーシャルワーカーは彼らが生活保護を受けられるように手続きをし、WAFCAIからは1台の車いすを提供した。今はマルダニ君とダルマワン君が交代でその車いすを使っている。「車いすがあっても使えない」母親は最初こんな言葉をもらっていた。また、WAFCAI内でも「車いすよりも、この家族にはもっと最低限の支援体制が必要だ」という意見が繰り返し出されていた。しかし、『車いす』という1つのきっかけが、地域ソーシャルワーカーとの出会いを生み、国からの支援を受けるという変化をもたらしたように、孤立していた家族の存在が近所の人たちに認知され、様々な人の手が届くようになれば、この車いすに乗って、家のまわりを散歩する二人の姿を見られる日も来るのではないかと。彼らの元に車いすがあれば、これから私たちがフォローアップを続けていくこともできる。そんな想いを持ってこの1台の車いすは届けられた。あれから1年、この家族にまだ大きな変化はない。しかし、彼らの元に車いすがある限り、地域ソーシャルワーカーと連携を取りながら私たちもしっかりと彼らを見守っていきたい。



車いす寄贈式に出席するダルマワン君